

室生犀星作

寂しき魚

朗読 佐藤遊歩



室生犀星（むろう さいせい）

1889年（明治22） - 1962年（昭和37） 石川県金沢市生まれ。

高等小学校を中退して、金沢地方裁判所に給仕として勤めるうちに、上司らに俳句を指導され、やがて詩人を志して上京。北原白秋の知遇を得て詩を発表し、当時無名の萩原朔太郎と親交を結ぶ。1918年（大正7）、「ふるさと」は遠くにありて思ふもの

の詩句で知られる処女詩集「愛の詩集」「抒情小曲集」を出版し、その清新な抒情的表現によって当時の詩壇に大きな衝撃を与えた。また、翌年には自伝的小説「幼年時代」「性に目覚める頃」を発表したが、生まれたままの一途な抒情が、人生への真率な態度となっていく過程がよく表現されていると評価され、一躍、新進作家として注目された。その後、童話の筆も執り、「寂しき魚」の他に「鮒吉・船吉・春吉」「オランダとけい」などの作品がある。小説の代表作は「あにいもうと」「杏っ子」「蜜のあはれ」「かげろうふの日記遺文」で、犀星はこれらの作品によって「女性を深く愛する作家」との評価を得ている。

「寂しき魚」は1920年（大正9）12月、「赤い鳥」に発表された。「古い沼に住む古い魚はしきりに何かを考えていた。月の光が魚を青白く輝かせていた。魚は、離れた都会を想像し、地上に出たいと願うが、からだがいふことをきかない。やがて安らかな死が訪れる」という内容。評論家の千葉俊一は「この時代の社会に底流していた閉塞感を見事に形象化している。強大化していく国家権力の支配体制の中で、大正文学はどこか現実世界に背を向け、おのれ一人の退行的で内密な夢を育んでいったが、この時代に花開き、隆盛をきわめたわが国の児童文学もこの延長上にあった」と「児童文学名作選・下」（岩波文庫）で述べているが、何よりも、人間存在の、そして生き物の存在自体の不思議と有難さが、しみじみと伝わってくるような作品であるといえよう。

「用語解説」

魚巢（うろ）

怜しげ（さかしげ）

魚の巢

利口ぶる

それは古い沼で、川尻かわじりからつづいて蒼あおくどんよりしていた上に、葦あしやよしがところどころに暗しげいまでに繁しげっていました。沼の水はときどき静かな波を風のまにまに湛たえるほかは、しんとして、きみのわるいほど静まりきっていました。ただ、おりおり、岸の葦あしのしげみに川蝦かわえびが、その長い髭ひげを水の上まで出して跳はねるばかりでした。

その沼はいつごろからあったものか誰も知らない。涸かれたこともなければ、減かったこともなく、ゆらゆらした水がいつも沼一杯にみなぎっていた。そのうえには、どんよりした鉛筆でぼかしたような曇おそった日ざしが、晩おそい秋頃らしく、重くもあしく、低い雲脚たを垂たれていたのです。

そこには非常に古い一匹うおの魚が住んでいて、岸の方の葦あしのくらやみに、ぼんやりと浮たきあがっていました。かれは水中の王者のように、その大きなからだを水面とすれすれに

させながら、いつも動かず震えもしないで、しずかに、ゆつくりと浮きあがっていたので
す。その魚の藍あいばんだ鱗うろこには、のめのめな水苔みずごけが生えていて、どれだけ古く生きて
いたかが解わかるのでした。ただに鱗ばかりではなく、尾やひれまでに微塵みじんな、水垢みずあかのよ
うなこまかい藻ものようなものが生え、それが顫ふるえるということもなく、かれのからだ一
面に震えていました。

その魚はいつも何かしきりに考えているような、澄んだおとなしい泳ぎ方をしていた。
たとえば、やや衰えはじめた青い目のひかりはいつの間にか薄らいで、ほとんど動くとい
うようなことがなかった。いつも森のなかのように静かで、たえず空の方をながめては、
また何か考えあぐんだように、間もなく沼の底ふかく眺ながめ込むのでした。沼の底は、こ

れもどんより曇って、幾枚もの硝子板ガラスいたを合したように、ある蔭はちぢみ、あるものは細長くなつて見えました。竹や水や古いむしろ 蓆の破れたなどが、いちめんに濃い陰影をつくって、そこにもこい 鯉やふな 鮒やなまず 鯰のようなものまで、一つずつの魚巢うろに潜りこんで、れいの青い目でそとを眺めていました。けれども、かれらは、ひるのうちは滅多に水の上まで、空気のあるところまでは浮きあがつてゆかなかつた。そうするには、昼間はあまりに恐ろしいような気がしたからです。そのかわり夜になると、かれらは珍らしい水と空気との境さかいめ 目まで行つて、月や星や風や空気や草木のささやきを知ることができるのでした。

ひとしく、その蒼茫そうぼうとしたふしぎな空、ふしぎな蒼白い星のかずかず、そういうものは夜になると沼の上を覆おおうてくるのでした。月や星のかげは、水中の祝祭にでも現われたように、矢のような青白い光の線状を乱射してくるので、かれらはその光のあいだを泳

ぎ廻りながら、ただ、水と空と夜との世界を遊びにふけるのでした。そこでは一切がかれらの仲間ばかりの世界で、何者もその美しい世界を乱してくるものがなかった。ただ、葦やよしの根が、さきの方に風をうけると、ふしぎに揺れて、水のなかで低い笛のような音を立てるのと、更^ふけるにしたがって繁くなる夜露が、しんとした水面にかすかな音を立てるばかりで、あとはただ虫のこえばかり聞えるだけでした。虫は水の中からも起ってくるように、あちこちで啼^ないていたのです。

けれども、古い魚だけは、夜もおちついて底の方へ下りようともせず、動こうともせず、ひとところじっと凝^こりあがって、ぽっかりと浮いているのでした。かれの背なかには、夜風がふれてゆき、星や月のひかりも、空にあるごとに、かれに触れて冷たく濡^ぬれてゆくのでした。そのたびに、かれの背中は蒼白く輝き、すこしずつひりひりと、一枚々々の鱗

がふるえるようになるのでした。それらの月や星のひかりが、この古い魚にとって、どれだけの喜びであったかもしれない。かれはその光に打たれるごとに、喜ばしそうにからだをすこしずつ動かすのであった。そうするときのみ、かれのからだは生きているように見えるのです。そのほかは、いつも、じっと死んだようになって動かないでいるのでした。

夜はちようどこの沼から三里ばかり離れている大きな都会には、盛りあがるような電燈の海が波うっていて、それが非常な巨大な軍艦のように黒ずんで、どっしりと重々しくなつて見えるのです。ちようどその余映のような、ほんのりした明るみが、この沼の水の上にも、あるかないかほどの明るみを浮ばしてくるものでした。

魚はその ほたる 蛍のあかりのようなものをまで なつか 懐しそうに、からだに吸いとりようにし

ていたのです。

「おれは晩になると、このほんのりした光さえ慕わしくなるのだ。あの明るい賑にぎやか
なところはいつたいどこのあたりにあるのだろう。そうして、それがおれには何故なぜ見るこ
とをゆるされないのであろうか。こうして、からだにまで光をうけて、おれはいつそこへ
ゆけるのだろうか。」

かれはそう考えると、青い目で、そらの方をゆつくりと挑めるのでした。空には大きな
都会のさまざまな街まちまち々の姿や賑やかさ、または音楽や燈影が、まるで地図のように広げ
られてくるのでした。白い道路と道路、都会の美しい肌はだ、それらが星と星とを織り込ん
で眺められてくるのでした。

「あそこには何も彼もある。おれが永い間考えとおしたふしぎな国がある。そこには一

切が光で見たさされているのだ。この沼のような暗みや水垢や塵芥ごみくたがあそこには一つもない。」

魚はこう考えると、すこしずつ、からだを動かしながらいました。星の位置が変わるごとに、かれもその静かな位置を変えてゆくのでした。ちょうどそれは物もの差さしで計ったように、しぜんに、かれは天上のうごきをからだに受けながら、その意志こころを継いでゆくもののようにでした。

「おれがいつも自分でも知ることのできないうちに、向岸むこうぎしの暗みへまで吹かれるように動いてゆく。ふしぎに自分でそのちからを知ることができないのだ。そして向岸の暗みへゆきつくと、間もなく、あおじろい夜明けがやってくるらしいのだ。あそこは水も冷たい。別な新しい水が湧わいている。」

魚はこうつぶやいているうちに、ふしぎに北へ北へとかれのからだなが流されてゆく。星もみな北へ動いているように、だんだん光を失ってゆくのでありました。

魚は、ときには烈はげしい日光をせなかにうけながら、沼の岸の方からだをすりよせ、そしてはぼろぼろと落ちる土くれをまで、なつかしそうに食べつくすのである。または木の板などに、からだなが痛むのも関かまわないうで、擦すり寄りながら、くるしそうに悶もだえているのであります。

「おれのまだ見ないところがある。この岸べさえ攀よじのぼってゆけば、それがはつきり判わかってくるのだ。おれは毎日この岸べにきて空の方をながめている。岸つづきの珍めづらしい山河や、夜になると明るくなってくる都会が、この岸つづきの果はてにあるのだ。おれはそれ

を考えるとたまらなくなる。」

かれはそう思いながら、じとじとになった岸の土をばつと呑みこんでは、くるしそうに吐いていた。泥どろにごりした水が乱れた汚きたない水脈をつくっては流れた。

「この土のあじわいさえも、いまはおれを苦しめるばかりだ。おれは一日も早く明るい地上に出てゆきたいのだ。ふしぎな地上、まだ見たことのないものが、数限りなくある地上——。」

魚は考え沈みながら、ぼんやりと、こんどは疲れきって浮いていました。それはまるで日光に透いた沼水のなかに、いつの間にか鱗のいろさえ衰えかけていたが、それでも、できるだけの努力と我慢とをつづけて、しつこく、その岸边をはなれようとはしなかったのです。他のいろいろな魚族はみんな暗く涼しい底の方に沈んで、やすらかに昼間はねむ

りふけっているのです。誰一匹として古いこの魚が、水の上にも動かないでいるとは気がつかなかったし、そんなことは若いぴちぴちした魚族にとっては何でもないことでした。唯かれらは時々底の方から、水の上にぼんやり浮いている大きな古い魚の姿を、まるでそれは描いたような姿でいることを不思議そうにながめていました。なかには、

「あれはやはり魚族のうちだろうか。ああいう大きなやつが、この沼にいたかな。」

そう鮎のようなものがいうと、とぐろを巻いていた長い魚はこう答えました。

「いや、あれは魚族ではあるまい。いつもあそこにいるから。まだおれは、あいつの動いたのを見たことがない。」

ところがまた一匹の鯉のようなさか怜しげな尾とひれをもった魚が、

「あれはこの沼じゅうで一番大きな魚だ。あいつは何年前からか知らないが、あそこに

じつとしてふしぎに何かを考えているのだ。あれは何も食わないらしい。水ばかりを呑んだり吐いたりしているらしいのだ。あれのそばへ寄ると、なんだか厭いやな匂においがする。」
そう言って、きみわるそうにその影をしずかに眺めました。

「だが、あいつはいつたい、何を考えているのだろうか。」

鮎あひのようなものが、水垢かを搔かきながら欠伸あくびをしいしい言いました。

「さあな。何を考えているのかな。」と長いやつがこたえると、ものうげに、くるくるとどぐろを巻いてやすんでしまいました。

そのとき水の上の影は、日光のあんばいで陽炎かげろうのようにゆらゆらしながら、それがまた沼底の方まで輪廓をえがきながら、大きなうっすりした陰影をおとしているのでした。
うすにごりした水底のかげが余り大きかったので、かえって小さい魚族はだれ一匹として

知るものがなかったのです。

古い魚は、やはり毎日のように浮きあがっていました。悲しそうに、ときどき、ぽっかりと空気をひとくち吸うとぽっと吐いて、さて、寂しそうに長い吐息をつくのです。その泡はあわすぐきえてしまいます。と、また、あとは死んだも同様の動かない姿がいつまでもそこにながく止っているのです。

「おれはこうしているうち、妙に気が遠くなる日がつづいてゆくのはどうしたものであろう。あたまが痺しびれるようになって、つい知らず識しらずうとうととしてしまうのだ。まるで夢を見ているような気がする……。」

と、かれは、ようようと葦の根にからだをささえながら、非常に弱くなったからだをつ

くづく眺めるように 眩つぶや きました。実際、かれは、いつか見たときとくらべるとからだ中が瘠せてしまつて、それに鱗のつやつやがほとんどなくなり、どこか、よろよろと尾ひれのちからも自由にならないようなところが見えました。その日はとろんとして何を見つめるといふことなく、弱々しく、たよりなくなつて見えるのでした。

「おれは自分でも次第にからだが重くなるような気がする。ともすると、じつとしていられなくなつて何者かがおれを引いているような気がする。そのため、おれは妙にひよろひよろするのだ。」

そう考えながらもやはり、

「この岸つづきに何かがある。おれにはわからないが何かが行われている。おれたちの世界にないものがそこにあるのだ。」と考へて、また、よろよろしました。

「おれのからだの上に何物かが乗っているような気がする。そのためおれは重くて自由に泳げないのかもしれない。」

魚はこう考えたときに、ひとりでに、くると裏がえしになって、白い腹をあらわしたのでした。その晒さらされたような白い腹は、あさましい褪あせた色をしていました。

「だが……こうしておれはもう起きあがるちからさえなくなったが、しかし何という気持ちができるのだろう。うつとりとした何とも言いようのない気持ちだ。ひよつとすると、おれはこのまま起きあがれないで、息が絶えてしまうかも知れない。それにしてもおれは何という安々したい気持ちになったことであろう。」

かれがそう考えているうちに、白い腹がすこしも脈をうたなくなりだしたのです。それはあまりに長く生き過ぎた老魚としての、どっしりした姿が水彫りにされたまま、しんと

した水の上に今は全きまでに浮きあがったのでした。

けれども、かれは幾年かの間考え通した地の上のものを、何一つとしてさぐる事ができなかつたのでした。

ただ安らかな死がかれのところにきたただけなのでした。